

子から親への

エール論文 コンクール2024

仕事や家庭で

頑張っている親へ

今だから言える

ありがとう。

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える論文コンクール

受賞作品集

つよみ、希望を具体的に体の中に入れることが必須だと思っています。私は、このエール論文を読むたびに新たな共感を体に入れることができます。

少しだけ我田引水になることをお許しいただきたいのですが、その例として、岡山大学で新たに動き出したしくみを紹介します。昨年末から、実践データサイエンスセンターが「高校生1000人プロジェクト」と呼んで、自分一人で知識習得を自動的に完遂していくことができる最新のeラーニング(マイクロステップ・スタディ)を無償で提供し始めています。それは5分程度の学習で英検の得点を1.7点あげられる見通しが学術的に検証されたユニークなeラーニングです。その中に、不登校や意欲を失った子どもの学習支援を、大学生や一般の支援者が、遠隔で提供できるLINEのようなコミュニケーション機能を持たせました。これで不登校の子どもの学習支援を低コストで提供できるようになります。このアイデアやeラーニングを無償で提供できる仕組みは、様々な人や団体が持つ欲求を深く共感し、つなぎ合わせることで実現できたものです。

自分の家族だけでなく、関係がないと思っている第三者や組織等々の、痛みや希望や夢を身近に感じることで、新たなイノベーションと社会変革を生み出していく上で欠かせない要素になると信じています。私が10年以上にわたり、このエール論文にかかわりを持っている一つの大きな理由は、自分の知らない子どもや親の感情を具体的に知ることができるからです。

エール論文は単に家族愛を共感するためのメッセージではなく、社会を変えていく燃料のようなものになってほしいと思っています。

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
会長 寺澤 孝文
(岡山大学学術研究院教育学域 教授)

エール論文を読ませてもらい、親や子の病気、不登校、親の転勤や転職等々、実に多様な試練が、それぞれの家族に降りかかり、それらを家族が一つになって乗り越える事実をたくさん知ることができました。世の中には同様、もしくは更に厳しい困難に直面している家庭も多いと思いますが、この論文を読むことでそういった困難はきっと乗り越えることができるんだという、前向きなエネルギーを手にすることができました。

今回、私がエール論文をかなり時間をかけて読み、審査させていただいている、大きなメリットをご紹介します。最近、イノベーションの重要性が叫ばれていますが、新しい技術や発想の根源は、他者の痛みや希望を共感できる能力にあると私は考えています。誰でも身近な人を助けたいと思いますが、多くの場合その問題を直接解決することはできません。例えば、不登校の子どもは学習に対して大きな不安をもっていますが、家族でそれを解決することは難しいことです。親が先生の代わりに知識を教える時間をとることはできません。AIを使った学習システムを開発すればよいかもしれませんが、それだけのお金を不登校の子どもに投入することはできません。しかし一方で、必死に受験勉強をしている多数の高校生は、無駄なく効率的に知識を覚える方法を必要としています。それを実現できるeラーニングシステムが高校生全員に対して使えるようになれば、ひとりあたりのコストは小さくなります。さらに、不登校の子どもの学習をどうにかサポートしてあげたいという共感を持った第三者はまた別のところにいます。不登校の子の不安を軽くしてあげたいと思う親の欲求、受験のため効率的な学習をしたいと思う受験生の欲求、不登校の子どもの支援をしてあげたいと思うボランティアの欲求等々、それぞれ異なる欲求をつなぎ合わせることでできれば、結果的にWin-Win-Winで、目の前の不登校の子どもの学習の不安を実質的に解消する方法が生まれます。その見えない解決の「筋」を見出すためには、多様な人の痛みや悩み、

単に家族愛を共感するための
メッセージではなく、
社会を変えていく
燃料のようなもの。

論文コンクールについて

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう。～子から親へのエール論文～」と題して、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考えることを目的に、高校生・大学生等から論文を募集いたしました(2024年6月～10月募集)。

<応募があった高校・大学等>

愛知県立春日井南高等学校、浦和明の星女子高等学校、おかやま山陽高等学校、創志学園高等学校、津山工業高等専門学校、徳島県立脇町高等学校、福岡県立朝倉東高等学校、舞鶴工業高等専門学校、明誠学院高等学校、立命館守山高等学校、愛媛大学、岡山大学、山陽学園大学、創価大学、千葉大学、南山大学、新見公立大学、山口県立大学

選考は、岡山県内の大学関係者による審査会にて行いました。昨年度に引き続き、岡山県知事賞、岡山経済同友会代表幹事賞、岡山大学長賞、入選、本コンクールを通じて多様性の教育推進に取り組んだ学校へ贈るダイバーシティ教育推進学校賞を選考いたしました。2025年1月17日に岡山県庁3階特別応接室にて表彰式を開催しました。

審査委員一覧 (50音順)

就実大学人文科学部総合歴史学科
教授 井上 あえか

岡山大学学術研究院教育学域
教授 片山 美香

山陽学園大学総合人間学部言語文化学科
教授 佐藤 雅代(審査委員長)

岡山大学学術研究院教育学域
教授 寺澤 孝文

岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域
准教授 樋口 輝久

「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま」について

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

実行委員会構成団体

国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県

事務局

株式会社ロゴデザイン



大学生部門
岡山県知事賞

母の口癖

山陽学園大学3年 林 鈴菜

「お母さんなんだから当たり前」、母はよくこの言葉を口にする。お母さんなんだから、毎朝娘の私にお弁当を作って当たり前。お母さんなんだから、学校がある日に私が寝坊して駅に間に合いそうにない時は、駅まで車で送って当たり前。私は、当たり前だなんて思ったことはないが、母の優しさについて甘えてしまっている。

両親が離婚してからは、積極的に家の手伝いをするようになり、次第に私も当たり前のように家事をするようになった。私は家事をしていると、私だけじゃなくて妹や弟も家事をしてくれているのにお母さんが毎日、私たち子どものために仕事や育児、私ができない家事を全部してくれているのだから少しくらい手伝えばいいのに。そう思うってしまう時がある。しかし、母は少しイライラしている私を見て、「学校とバイトで疲れる気持ち分かるよ。あとはお母さんが全部やっとお風呂入っておいで。お母さんが子どものために働くのは当たり前なんだから。」と言って、私に優しい言葉をかけてくれる。

もしも私が母の立場だったら、嫌な顔一つせず同じ事が言えるだろうか。「お母さんなんだから当たり前」なんてことは決していない。きっと母も仕事で疲れている。それに、週末は弟の部活の試合のために、早い日は朝4時に起きてお弁当を作ったり、試合の準備を手伝ったりしている。そんな中、「お母さんなんだから当たり前」と言って優しくしてくれる母を心から尊敬し、感謝の気持ちでいっぱいになる。

今は妹も弟二人も中学生で、自身の身の回りのことを少しずつ自分の力でできるようになってきた。私の妹と弟二人は三人とも年子であるため、幼い頃、特に下から0歳、1歳、2歳の時はとても大変だったと母が言っていた。その頃、母は一人で幼い子ども三人を連れてスーパーへ買い物に行ったり、弟が夜泣きする度に起きてあやしたりしていた。それに加えて、私は習い事でバスケをしていたため、練習や試合がある日は妹と弟を連れて送迎したり、習い事で必要な服や道具を一緒に買いに行ったりしてくれた。

私は母が大変なのは分かっていたため、できるだけ自分ができることはしようと思い、妹や弟のおむつを替えたり、母が準備した離乳食を食べさせたりしていた。それでも、当然母は忙しく、睡眠時間も全然取れていなかった。私は、母がこんなにも自分達のために毎日働いてくれているのに力になれないことが悔しかったのを覚えている。

また、母は偏頭痛持ちで、私が中学生になった頃からは、頭痛がひどくて動けそうにない時は私を頼ってくれている。とは言っても、母は「お母さんなんだから」と言って、大抵は頭痛などの体調不良であっても普段通り仕事や家事をしてくれる。それに、私が幼い頃、母はどれだけ疲れていても、どれだけ体調が悪くても、それを表に出すことはなかった。「お母さんなんだから」と、辛い顔を見せずにいつも明るく振る舞ってくれる母を、母親としてだけでなく、人として尊敬する。

私は、こんなにも頼もしくて明るい母親の元に生まれることができ本当に幸せだと思う。今は、まだまだ母を喜ばせるようなことはできていないが、これからはもっと家事を手伝ったり、妹や弟のお世話をしたりしていきたい。そして、いつか私が母親になった時には「お母さんなんだから当たり前」と言って、母のように頼もしく明るい母親になりたい。また、今後母に助けや介護が必要になった時には「娘なんだから当たり前」と言えるように成長しようと思う。



高校生部門
岡山県知事賞

私の自慢の親

創志学園高等学校 1年 松本 千莉

私の親は、私の人生の中で最も影響を与えた存在の一人です。特に、両親の仕事に対する姿勢や取り組み方は、私に多くのことを教えてくれています。私の父はトラック運転手として働いており、母は小学校の給食を作っています。それぞれ異なる職業ですが、彼らの仕事から学んだことは共通しています。それは、最後までやるべき事をやりとげること、そして情熱、責任感をもっていることです。

父は、運送会社に勤めており、夜遅くもトラックを走らせて、食品や物を各県のお店に届けています。父の仕事は力仕事なため、体力と根気が必要になります。朝から家を出て夜も走り、荷物の積み込みをし、お昼頃に家へ帰ってきます。2日に1回しか帰ってこないような長時間の仕事を毎回ちゃんこなす、そんな父を見ると、父がどれだけの自分の仕事に誇りを持ち、毎日、目標を持って家へ帰ってくるかが分かります。仕事と並行に父がどんなに忙しい時でも、私達、家族との時間を大切にしてくれます。その姿勢は、私に「仕事は大切だけれど、家族と時間も同じくらい大切だ」ということを教えてくれました。

一方、母は小学校の給食を作る人として働いています。母は、子ども達が大きく育つために必要な給食を毎日がんばって作っています。母はとても性格が明るく、仕事場の仲間や子ども達のコミュニケーションを大切にしている姿が印象的です。母が毎日がんばっている姿を見ると、人と人の繋がり大切さを実感します。母は、ただコミュニケーションをとるのではなく、子ども達が午後からもがんばれるように、仕事場の雰囲気明るくするためにどうすれば良いかを常に考えています。時には、仕事場で悩みを抱える人の話を聞き、寄り添うこともあります。このような母の姿勢は、私に、人との繋がりや理解の大切さを教えてくれます。母も父も私にとっては、自慢の親だと思っています。

父と母の仕事を見ていると、役割は異なるものの、どちらも社会に貢献していることが分かります。父が運ぶ商品は、世の中の生活を守り、母が作る給食は子ども達の健康を支えています。どちらの職業も、人を思い、責任を持って行動する事が求められます。私も両親のように、自分の行動に対して誇りを持ち、責任感を持って取り組むことが大切だと感じています。

また、両親の仕事が私達の生活に与える影響は、直接的なものだけではありません。父がトラック運転手として働く姿を見ていると、今のトラックの2024年問題について、世の中の事に興味を持つようになりました。母の給食を作る姿勢を見ていると、子ども達の成長していく姿を見届けることの楽しさを感じるようになりました。私は、両親の影響を受けて、自分の将来を考える際に、人が笑顔になるような、人の役に立つ仕事につきたいと思うようになったのです。もちろん、親の期待に応えることがプレッシャーになることもあります。しかし、両親の仕事を通じて学んだことは、私に勇気を与えてくれます。父の仕事への目標とやりがいや母の人を笑顔にするような人との繋がりを見習い、自分も少しでも社会に貢献が出来る人間になりたいと強く思うようになりました。

私の親の働く姿を通じて、仕事の重要性や社会への貢献について学ぶことができました。両親は単に家庭を支える存在であるだけでなく、多くの人々に影響を与える立場にいます。その姿が私の中に根付いており、将来の自分がどのような仕事を選ぶかに大きな影響を与えるでしょう。今後私は、両親が築いてきた価値観や考え方を胸に、自分自身の道を歩んでいきたいと思います。そして、いつかは私も多くの人々に影響を与えることができるような、仕事に取り組むことを誓います。



大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞



眠り姫と王子様

南山大学4年 小笠原 彩

朝、眠たい目をこすりながらリビングに行くと、父と母が立っていた。「彩さん、眠り姫が目を覚ましたよ！」父の嬉しそうな声を忘れることはないだろう。

母は私が高校3年生の時に心の病気になった。2020年。先の見えないコロナ禍と人生をかけた受験勉強が幕を開けた時期だった。私は受験生として必死に毎日を過ごしていた。まぶしい朝日を浴びながらの勉強から1日が始まり、放課後は塾にこもり、家に帰ってくるのは夜11時近くだった。母の体調も少しは気になりながらも、自分に精一杯の1年間だった。

晴れて大学生になった私は一人暮らしを始めた。大学は実家から通えない距離ではなかったが、勉強も部活もボランティア活動もアルバイトも遊びも全力でやりたい、コロナ禍で失われた青春を取り戻したいという思いから一人暮らしを決めた。スケジュール帳には予定がぎっしり。夜遅くまで友人と話し込む毎日が楽しかった。

時は過ぎ、大学3年生の秋。実家に帰ると母親との会話がかみ合わなかった。次第に母に幻覚・幻聴の症状が現れた。挙動不審になる母に「大丈夫だよ。」と声をかけながらも私も不安でいっぱいだった。かかりつけ医の判断で母は入院することになった。幻覚幻聴が起こった確かな原因は不明だが、薬を過剰に飲んでしまったからではないかと父は教えてくれた。母の入院中、私は久しぶりに多くの時間を実家で過ごした。父はテレワークで仕事をこなし、仕事の合間の時間を見つけては母に会いに行っていた。父はいたって平然としていた。あんなに弱った母を見ても、家に帰ればご飯を作り、洗濯物を回して干し、何事もなかったように仕事を続けていた。

一度、面会時間を勘違いして、病院についても母に会えなかった日があった。普通に考えれば、夜に面会できないことなど容易に想像出来る。当時、私も現実を受け止めるのに精一杯だった。私が大学生活を楽しんでいた間、ずっと母には寂しい思いをさせてしまったのだな。父は仕事が忙しい上に精神的にも辛いはずなのに、母を献身的にずっと支えてくれたのだな。2人とも私に頼りたいこともあったはずだけど、理想の大学生活を優先させてくれたのだな。入れない病院を見上げながら、2人に対する感謝や申し訳なさ、自分自身の情けなさが溢れだして涙が止まらなかった。

少し状態が落ち着いて退院してからも、母はほとんどの時間をベッドの上で過ごしていた。そんな母を父は「眠り姫」と呼び、毎日お世話をしていた。私は就活が落ち着き、週の半分は実家で過ごすようになった。私は実家での時間を大切に過ごすようになった。父がテレワークをしている間に栄養たっぷりのお昼ご飯を作る。母がご飯を食べ終わるまではそばにいる。たまに母の調子が良い日は3人で外食もするようになった。

大学4年生の夏。大学卒業も就職先も確定した。就職先には、実家から通いやすくテレワークも推進している情報系の会社を選んだ。私は秋頃に実家に戻ることを決めた。学生生活の残りの自由な時間は家族で過ごしたい気持ちが大きかった。

実家で過ごしていた9月のある日。朝、起きるとリビングを掃除中の母が「おはよう。」と挨拶をした。驚いた。眠り姫が目覚めた記念すべき日になった。私の目に父と母の2人の笑顔が映ったとき、父は母にとってかけがえのない王子様だなど微笑ましく感じた。

朝、嘘だろ?という暑さの日差しを浴びながら家族3人で洗濯物を干す。父がテレワークをする隣の部屋で、私と母はご飯の準備をする。お昼はリビングで家族3人、おしゃべりしながら食卓を囲む。

病気で本当に苦しい中、懸命に生きてくれた母。一家の大黒柱として、懸命に家族を支えてくれた父。家族に笑顔が戻った。私は毎日が幸せな気持ちでいっぱいだ。

私は来年から社会に出る。2人が二人三脚で戦ってきた約4年半、私は沢山の出会いに恵まれ、将来に生きる経験を積んできた。これから2人への感謝を恩返しできるよう、自分に出来ることを精一杯頑張りたい。

お母さんへ。よく「働かなきゃ。」っていうけれど、健康が1番。お母さんの笑顔のためなら私がお母さんの分まで働くよ。

お父さんへ。世界で1番優しくて、芯のある父親です。無理せずに自分のやりたいことも楽しんでね。



高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞



親ときどき兄弟、そして仲間

津山工業高等専門学校 1年 谷口 陽

「はる、おはよう。朝じゃで」

母は毎朝、元気いっぱい僕を起こす。健康診断の結果によると低血圧らしいが、「低血圧は朝が弱い」という定説を覆すほど、毎朝元気だ。たまに僕の方が早く起きて、母を起こすこともあるが、起きた瞬間からテンションが高く、本当に元気なので、寝起きの悪い僕はただ尊敬する。更に胃腸も元気なようで、朝からご飯をたくさん食べている。今年の猛暑でも夏バテを知らないようだ。

そんな元気な母だが、一度だけ手術をしたことがある。僕が小学校4年生のとき、子宮頸がん検診で引っかかり経過観察中であったが、いよいよ円錐切除といって子宮の先を切り取る手術をすることになった。何年かあとに聞いた話によると、経過観察を続ける選択もあったが、病気に怯えて日々暮らすことと家族に心配をかけることを嫌った母が、自ら手術に踏み切ったそうだ。母の入院中は生まれて初めて4日間も離れて過ごすことになり、すごく不安になったことを覚えている。入院の日も手術の日も僕は学校で会えなかった。手術の次の日に病室で会った母は貧血に苦しんでいて、僕は何も言えず母のベッドに腰かけてただ時間を過ごしたことを覚えている。退院した日は嬉しくて、ずっと母にくっついていた。

それ以来、母はずっと元気でパワフルで、感染症に罹患した僕の看病をしても、感染せず元気に過ごしている。家庭だけではなく、職場でも仲間の集まりでも、基本的にどこでも楽しそうに過ごしているようで、そのバイタリティはすごい。

僕は一人っ子なので、家では一緒に遊ぶ人がいない。例えば、一緒にカードゲームをしたり一緒にテレビを観たりといったことができる兄弟がいない。それでも兄弟がいなくて淋しいと思ったことがないのは、母がその役目をしてくれたからだ。僕の年代に流行りの遊びを母は熟知しており、僕の友だちからも名前と呼ばれ、とても仲良くしている。ときに兄弟として接してくれる。

僕の住まいは母の実家で、母方の祖父母と同居している。とくに祖父は自分に娘しかいなかったため、僕のことをとても可愛がってくれる。しかし、祖父は几帳面で細かい性格のため、のんびりゆったりしている僕に対して、「あれを片付けなさい」「早くこれをしなさい」というように、せつついてくることがある。たまにイライラしてしまいそうになるが、そういうとき母は、「今日も元気じゃな。はいはい」と笑えるように流してくれる。祖父母に対する愚痴などを言い合うときの僕と母はチームで、お互いに冗談を言い合って気持ちを落ち着かせている。このように、ときには仲間として接してくれる。

母はIT系のエンジニアとして働いており、専門系の知識がすごい。マイコンやプログラミングはお手の物で、更には高校生レベルの数学や物理、英語などは簡単にわかってしまう。塾に行かなくても聞いたら教えてくれるので、中学時代は友人に羨ましがられた。母の年代は結婚や出産で仕事を辞める人が多かったが、母は辞めなかった。なぜ辞めなかったか尋ねたら、「仕事を辞めてしまうと自分のアイデンティティが確立できないし、自分の子どもは自分で食べさせて育てたい」と言われた。母はエンジニアとして働きながらシングルマザーで僕を育てているが、そのせいでつらい思いや淋しい思い、大変な思いをしたことはない。仕事を調整しながら、学校行事も役員も積極的に参加してくれた。大部分は親として接してくれる。

このように様々な立場で僕と接してくれるが、いつも僕を第一に思ってくれていることがわかる。ただ、僕はそれを当たり前と思って育ってきたので、その有難さに気づいたのはつい最近だ。だから「もう大丈夫だから、自分のことをしなよ」という殊勝なことはまだ言えない。僕が学校を卒業するまでもう少し、僕のことを大事に考えてくれながら、「親ときどき兄弟、そして仲間」として接してほしい。そのために、健康で楽しく過ごしてくれることを願っている。



大学生部門
岡山大学長賞



ごはんがつなぐ母と私

岡山大学 2年 山田 紋歌

小学校中学年の時、母は「学校に行きたくない」という私の手を引いて毎日保健室へ送っていた。「どうしてなの?」と何度も聞いてくれたが、いつもうまく答えることができなかった。泣きながら学校に通う私の姿を見ることは母にとって非常に心が痛むことだったろう。この頃は母も私も暗闇の中にいたように思う。

高学年に進級する頃に私は教室に入り、授業を受けることができるようになった。その一方で、母は体調を崩し休職するようになった。休職し始めてから母は毎日晩ごはんを作るようになった。久しぶりに母が作ってくれた温かい、ほっとするような晩ごはんがおいしかった。そして、学校に頑張って通った後に食べるそのごはんが私の毎日のご褒美となり、いつも楽しみだった。この頃は私にいくつかの光が差し始めた時期だ。

中学校に入学する時、母は復職した。しかし、母は復職してからも定時に帰宅し、ごはんを作り続けてくれた。一方の私は少し遠くにある学校に通い始めた。初めての電車通学、そして知り合いがほとんどいない環境での学校生活が始まり、私は不安になることや疲れることが増えた。しかし、帰宅すると母のごはんを食べることができると思いながら頑張ることができた。そして、母のごはんを食べると不安や疲れを吹き飛ばすことができた。この頃、母のごはんは私の希望の光となった。

高校に入学する頃、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるったことにより、約2か月間の自粛生活が始まった。しかし、母は仕事のため、今までと変わらず家を空ける時間が多かった。一方、家にいる私は母の負担を減らすことができないかと家事を手伝い始めた。今まで家事をしてこなかったのに、全てが初めてで苦戦することが多かった。その中で仕事から帰り、家事をこなす母の偉大さを感じた。学校再開直前ともなると、ほとんどの家事を一人でこなすことができるようになった。しかし、料理だけは「こなす」という気持ちではなく「おいしく、楽しんでもらえるようにふるまう」という気持ちに移り変わっていた。毎日、私の作るごはんが母の光になってほしいと願っていた。

しかし、学校が再開すると、私の帰宅時間が遅くなったため、次第に料理を作る機会は減っていき、ついにはぱたりと途切れてしまった。それと同時に母と私をつなぐ「ごはん」という光も途切れてしまったと感じた瞬間だった。

大学受験のシーズンに入り、再び母が休職することになった。その時、毎日受験のために勉強に励んでいた私のそばにはいつも母の作るごはんがあった。テストで結果が悪くなかった日も、思うように成績が伸びず、投げ出したくなかった日も、ごはんを食べる時間になると、おいしい、ほっとするような味がそこにあった。そして、私はそのごはんをエネルギーに変え、もう一度受験勉強に向き合うことができた。この頃も母のごはんという光が私を支えてくれた。

大学に入学し数か月後、母は復職した。一方で、私は昼や夕方に帰宅することが多くなった。そして、私は時間に余裕ができたため、高校に入学してからできていなかったごはん作りを再開した。レシピを調べて作ることが多いが、なんとなくほっとしたい時、母の料理を作ろうとする。しかし、味を似せることはできるが、何か物足りない。やはり、母の料理には食材でも調味料でもない、母の温かさが入っていて、それによって私は回復できているということを実感した。

おいしく、栄養バランスの良い、そして楽しく食べることができるごはんを振る舞うことが私から母への日々のエールになり、そして母の光になることを願って、私は今日もごはんを作っている。

最後に、この場を借りてなかなか伝えることができないメッセージを母に送る。

お母さんへ
小学生の頃に色々迷惑かけてごめんね。きつと、とても大変だったよね。そんな私は今、色々な料理を作ることができるようになったよ! だけどやっぱり、世界中どこを探してもないような唯一無二のお母さんが作るご飯が大好きです。また一緒に作ろうね。



高校生部門
岡山大学長賞



私のお母さんでいてくれてありがとう またね

立命館守山高等学校3年 古田 夕葵

私が今元気に生きて、こうして想いを綴ることができているのは、お母さんがお母さんで居続けてくれたから。私のお母さんでいてくれて、ありがとう。そして、ごめんなさい。

小学生の頃、学校に行くのが辛くなった。その理由が何だったのかは今も正直よくわからないけど、小さな出来事が複雑に絡みついて耐えられなくなったような気がする。母のことは大好きなのに学校に行くことだけではできなくて、毎日心にもない刺々しい言葉を吐きながら終わりの見えない戦いに消えてしまいたいと思っていた。学校を拒否したいと思う理由は自分でも分からず、説明できないのに学校に行くことだけはたまらなく辛くて苦しい。そしてそんな私の存在が要らぬ争いを生んでいるという事実が1番辛かった。毎晩、朝が来るのが辛くて、目が覚めれば朝が来ていると思うと眠ることが怖くなった。

今は全日制の高校に通っている。探究の授業では、怖かったけれど自分の過去と向き合うことを決めた。学校に行かないという選択肢を選ぶ子供達とその家族の抱える劣等感を課題として活動している。不登校問題に長く取り組んでいる大学の教授にお話を聞いたりフリースクールへの参加等、精力的に情報収集を行ってきた。まずは知識として情報や価値観を更新していく中で、実は当時母の方がもっとも辛かったのではないだろうか、と考えるようになった。感情は数値で測れるものではなく、比べるべきものでない。また、その人の経験値やキャパシティにより捉え方は異なることを理解した上で、それでも母の抱えていたものは並大抵のものではなかったと思うのだ。

客観的に私たち家族を振り返ったとき、両親は学校に行きたくないと言いついた原因に対する対処より、私が登校を拒否しているという問題行動を解決しようとした。私にとって登校拒否は「学校に行きたくないと言うほど本気で辛い」とSOSのつもりだったが、誰もそれには気が付いてくれなかった。この世界に誰も味方がいない感覚に陥り、あの頃は自分の心を守ることに必死だった、と分析した。

それと同時に母の立場に立って考えてみたとき、見え方が全く異なることにも気が付いた。欠席が続く状況で学校や塾の先生、いわゆる社会と私の架け橋となったのは母。母に来させてもらう他に方法のない先生たちと、外に出ることすらも拒む私、双方の相反する要望の板挟みになっていた。父は単身赴任になったばかりで、この現状の責任は母にある、と電話越しに話す声を聞いたこともある。又最近になって、会社でも、私を理由に辞めるべきだと説得させられたことがあると母は話してくれた。不登校児童の母親の5人に1人は離職させられているというデータもある。社会は段々とボロボロになっていく私たち親子を見て、それでも気丈に振る舞おうとする母にその責任を向けたのだった。不登校支援と名乗って不登校児童生徒に向けた取り組みはあっても、母親がその肩の荷を下ろせる場所はなかったと思う。

母は私の知らぬ間に不登校の啓発本を買い漁っていた。それも最近知ったことで、全く気が付けなかった。登校云々の前に正解のない“子育て”の中、味方もいない状況で矢面に立たされ続けた母は1人でどれだけの不安や恐怖、自己否定と闘ったのだろうか。それでも今日までずっと私のお母さんでいてくれている。

今、世界中のお母さんがお母さんという肩書きを一旦置いて、1人の人間として深く息ができる場所はあるだろうか。不登校を経験した今、学校に行くとか行かないとか、仕事をするとかしないとか、社会の中で正解といわれる型にハマる必要はないと強く思う。親子であつても私たちは残念ながら違う人間であり、親は子供の人生を正解に導くことに責任を持つ必要はない。私たち子供にとっては、親が心から幸せに自分の人生を謳歌してくれていることが何より人生の希望になるのだ。お母さんが自分の人生を生きられるように、私がつもつと自立するから。お母さん、今までありがとう。でももう大丈夫。これからは、お母さんじゃない人生も大切に生きてね。



入 選



高校生部門

津山工業高等専門学校1年

河本 紬姫



ダイバーシティ教育推進学校賞



おかやま山陽高等学校

創志学園高等学校

津山工業高等専門学校

徳島県立脇町高等学校

明誠学院高等学校

(50音順)